



14 佐々木清七

《大太鼓図織物壁掛》 一枚

明治三十二年（一九〇九）
綴子 本紙二八四・五×一八〇・〇

佐々木清七（一八四四～一九〇八）は、帯地の生産を家業としていた佐々木家に二十五歳の時に養子に入り、織法の改良や織機の考案に工夫を重ね、新しい帯地の発明のほか、それを窓掛等の室内装飾用の織物に応用して海外にも輸出した。またその一方で、明治二十三年のパリ万国博覧会以来、例えば二十六年のシカゴ万国博覧会に出品した「祇園山鉾図織物壁掛」のような美術装飾品も制作して国内外の博覧会等に出品し、受賞を重ねている。さらに当時の京都染織業界においては、中心的立場にあつて業界の発展、後進の育成にも貢献した人物である。

その佐々木が宮内省から本博覧会のために制作を命ぜられたのは、織物の作品であった。織物の特性を熟知している佐々木は、宮内省とのやりとりの文書の中で、その図案について「機織ノ技術上、山水人物花鳥等ノ写生ニ於テ氣韻ノ生動ヲ取ルニ乏シク、よつて「實際ノ機織ニ當リ候テハ、配色法、遠近法等、今一層精確鮮明ニ出来可致、又其ノ機織ノ方法ニ至リ候テハ専ラ研究ノ上成就可仕存候」として、慎重に図案を考慮している旨を伝えている。そして、考慮を重ねた結果「高尚ニシテ華麗ナル大柄ノ織成ニ着目シ、楽器竈太鼓ヲ正式ニ模写」した図様を選んだ。舞臺左方の位置に整えられた華麗な大太鼓を大きく画面中央に据え、背後に幔幕と桜樹を配したこの図様の原図は、画家の原在泉（一八四九～一九一六）と田中幽峰（一八六一～？）による。

また制作にあたっては、伝統的な高機を特製して用いた熟練工（織手二人、空引四人）によつて百六十六日を費やして製織したこと、糸の染めは日本の伝統的染料とドイツの染色研究の成果による優れた技術による百十余種の色糸を用い、それに金糸、銀糸、さらに平金箔をも加えて用いたことが、佐々木提出の出品解説書に記されている。実際、本図は絵画的な繊細な図様が見事な色糸のグラデーションによつて織られ、その織製技術の高さが十分に表れていると同時に、図様のにも、色彩的にも、日本の伝統を示す装飾性の高い作品に仕上がっている。本作は同博覧会において、金牌の評価を得た。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

皇室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 47

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十年七月十九日発行

© 2008 The Museum of the Imperial Collections